

健康メモ

夏の皮膚病について

広島市東区医師会理事
広島鉄道病院皮膚科部長 堀内 賢二

立秋を過ぎた

とはいえ、暑い日々が続いています。夏は皮膚病が多く発生し、開業医、病院を問わず皮膚科外来は混雑します。以下に代表的な夏の皮膚病について、説明します。



一、あせも

一般には子どもの病気と思われていますが、発熱のため寝たきりになった老人にもみられます。首、背中など汗のかきやすい部位に多く、赤い水疱などを認めます。着衣を薄く

し、風通しのよい環境を作ることが大切です。但しエアコンや扇風機の風を直接当てないようにしましょう。

二、虫刺され

蚊や蚋(ハエ)の場合は、市販の虫刺され用塗り薬で対処可能ですが、蜂やムカデに刺された場合は局所の腫れや痛みを伴ったり、ショック症状を示したりすることがあるため、皮膚科専門医への受診が必要です。ステロイド(副腎皮質ホルモン)の内服や点滴注射を行います。また、今年は昨年以上にドクガ皮膚炎が流行しています。チャドクガ幼虫の毛は、衣服の間から入り込むため、体に多数の発疹を生じます。さらに、ネコノミ刺症があります。野良猫の多い地域にみられます。膝から下(ネコノミが跳躍できる高さに相当)に大きな水疱を作ります。類天疱瘡(れいてんほうそう)など自己免疫性水疱症との区別が必要なことがあります。いずれの場合も、局

所の冷却と治るまでの禁酒は大切です。(飲酒と香辛料摂取はかゆみを増強します。)

三、とびひ(伝染性膿痂疹)

これも幼児、小児に多く発生しますが、細菌感染症のため成人にも発症することがあります。虫刺されを掻いていると、二次的に発生することがあります。主に黄色ブドウ球菌が原因となりますが、MRSA(メチシリン耐性黄色ブドウ球菌)が原因のこともあります。但し院内感染のときと違い、ペニシリン系やセフェム系の抗生物質内服によって容易に治癒します。毎日固形石鹸を用いてシャワーをし、患部を清潔に保つこと、タオルは共用しないことが重要です。